

基礎ゼミナール

平成19年度個別授業評価を踏まえて

都市教養学部理工学系・准教授

小林 正典

はじめに

「基礎ゼミナール」は、平成17年の首都大学東京開学時に教養教育の新科目として登場し、今年度が3年目になる科目である。基礎ゼミナール教育準備チーム会合資料によると（クロスロード第3号の青塚先生の記事参照）、内容は以下の通りである。

ねらい

- ・ 受動的学習姿勢から能動的学習姿勢への転換
- ・ 課題解決に必要な技法の体験的習得
- ・ 豊かな人間関係の形成

授業内容

表現力やプレゼンテーション能力を向上するための調査、口頭発表、レポート作成などの実施と、多様な価値観の認識や豊かな人間関係の形成を促すための共同研究や討論を中心とした授業。方法については、各教員がテーマに応じて計画。

上記を実現するため、具体的には次のような特色を持たせて開講している。

- 1) **必修の教養科目**：本学の特色のひとつとして上記の目標を全学生に習得させるため、必修科目に指定されている。総合大学の特色を生かし多様な価値観をもつ学生を同一クラスに集めるため、テーマを学生の専門とは独立に選択する。また、クラスの希望者が多い場合は抽選で他のクラスに移ってもらう。したがって、教員は、文系・理系等を問わず受講できるよう予備知識やテーマに気を配る必要がある。なお、2年次以降でキャンパスを移動する場合もあり、1年次で単位取得することが強く推奨される。
- 2) **「鉄は熱いうちに打て」**：1年次前期に開講し、入学してすぐに高等学校までとは異なった学習姿勢の重要性を認識させる。
- 3) **知の技術の習得**：課題発見・解決と自己表現を主とし、コース等の専門のための知識・技術の伝達は目的としない。
- 4) **学生参加型**：教員からの一方的な情報提供・質問や演習課題の提供がなされるのではなく、受講生同士での

議論や作業を主とする。出席し参加することが重視される。必要に応じTAを配置し、またノートPCを貸与している。

基礎ゼミナールは、最初に「都市文明講座」を受講した後、少人数の「基礎ゼミナール」クラスに所属して、担当教員の元で上記のねらいの実現を目指す。今回の授業評価はクラスごとのアンケートであるので、個別質問項目は後半のゼミナールに焦点を絞って作成した。

個別項目選定の意図・手続き

基礎教育部会内の基礎ゼミナール部会での議論のうへ、基礎ゼミナールは他に類を見ない科目であることも考慮して、以上の趣旨が教員・学生ともに伝わっているかどうかを聞く個別項目を4つ用意した。

[主題設定] シラバスの内容は自分の興味に沿っていた。TE：さまざまな所属の学生が興味をもつテーマを設定した。(以下TEは省略)

[問題発見] 問題発見と、その解決に向けた取り組み姿勢の重要性を認識した。

[表現能力] ディスカッションやプレゼンテーションなどの自己表現能力を向上させることができた。

[バランス] 教員によるテーマについての解説部分と、受講生による議論、調査、発表の部分の時間的なバランスは良好だった。

平成19年度の授業評価（次頁の資料を参考）

まず、クラスデータの単位は、クラスごとに参加した学生の平均を四捨五入した値であることに注意しておく。「5」や「1」は極めて強い傾向が出たクラスがあることを表している。全学生のSEデータの比率とは異なる。

[問題発見] において「5」となる優秀なクラスがある一方で、特に、[バランス]で否定的な結果が出たクラスがいくつかあったことが目を惹く。また、個別項目ではないが、成績評価方法についての説明が十分であったと感じていないSEが8割あった。授業時間以外でかける時間も、平均でゼロというクラスが2割弱ある。

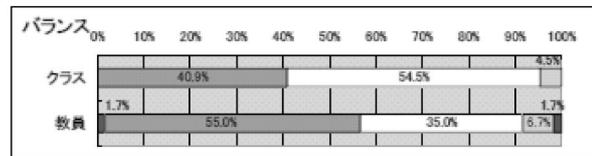
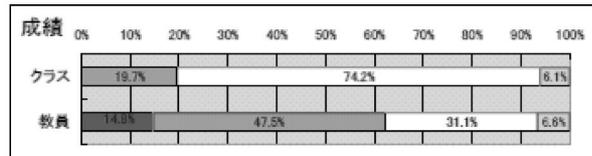
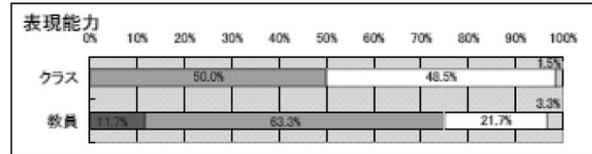
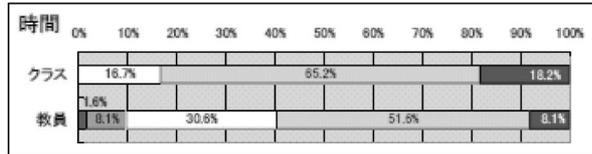
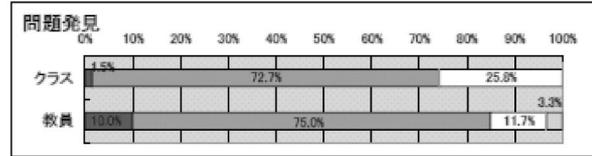
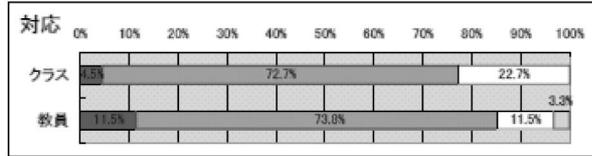
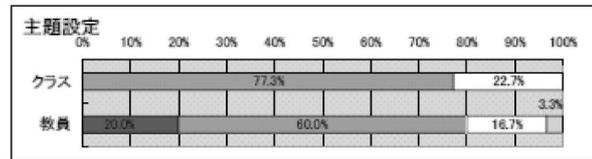
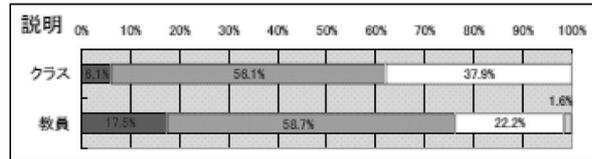
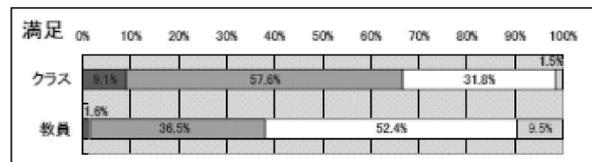
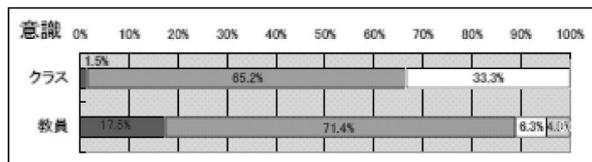
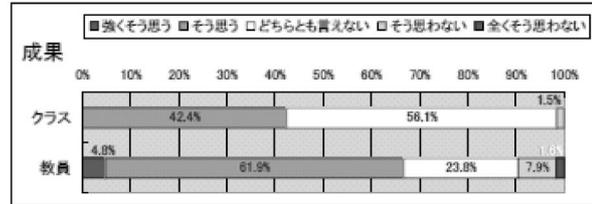
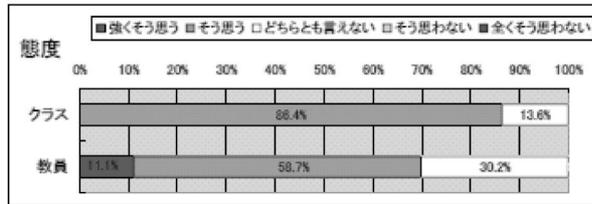
幸いにも[満足]においてはSEで「4・5」の割合が昨年度より増加した。担当教員の方々のご尽力に感謝したい。

来年度への対応と改善

基礎ゼミナールは、担当していない教員の大多数にとってはまだまだ見慣れない科目であろう。基礎ゼミナールの趣旨の徹底、特に、時間配分の適正化については、来年度からのシラバス作成にあたり、基礎ゼミナールの手引きの改定等を通じた、一層の徹底が必要であろう。

成績評価基準については、現在全学的に明確化を急いでいるところであり、基礎ゼミナール部会においても議論している。同一名称の必修科目であることから、極端な不公平感のない評価基準の目安を作成することが重要であろうと考えている。平に皆様のご協力を仰ぐ次第である。

資料 クラスデータとTEデータの比較 (FD委員会作成資料より抜粋)



	強くそう思う	そう思う	どちらとも 言えない	そう 思わない	全くそう 思わない
態度 (p=0.001)					
クラス	0	57	9	0	0
教員	7	37	19	0	0
意識 (p=0.000)					
クラス	1	43	22	0	0
教員	11	45	4	3	0
説明 (p=0.063)					
クラス	4	37	25	0	0
教員	11	37	14	1	0
対応 (p=0.093)					
クラス	3	48	15	0	0
教員	7	45	7	2	0
時間 (p=0.014)					
クラス	0	0	11	43	12
教員	1	5	19	32	5
成績 (p=0.000)					
クラス	0	13	49	4	0
教員	9	29	19	4	0

	強くそう思う	そう思う	どちらとも 言えない	そう 思わない	全くそう 思わない
成果 (p=0.001)					
クラス	0	28	37	1	0
教員	3	39	15	5	1
満足 (p=0.004)					
クラス	6	38	21	1	0
教員	1	23	33	6	0
主題設定 (p=0.001)					
クラス	0	51	15	0	0
教員	12	36	10	2	0
問題発見 (p=0.023)					
クラス	1	48	17	0	0
教員	6	45	7	2	0
表現能力 (p=0.001)					
クラス	0	33	32	1	0
教員	7	38	13	2	0
バランス (p=0.170)					
クラス	0	27	36	3	0
教員	1	33	21	4	1

注: SEを基に算出したクラス毎の平均値(四捨五入)を1サンプルとしたデータ